

特集記事 「この家でこの地域で生活つづける その3」

# 最期の時間を穏やかに… 寄り添った家族、そしてスタッフの想い

数年前にたいしよう生協診療所でお看取りをした患者さん。余命わずかの中で大切な家族と穏やかに過ごすことができたAさん。本人と、そして家族にとってかけがえないひと時がそこにはありました。

それは何年か前の、夏前の出来事でした。

診療所の外来業務をしていた私に、一本の電話が。

「お父さんが…もうアカン…来て下さい」

電話の主は、Aさんという患者さんの奥さんでした。

泣いて言葉にならない奥さんからAさんの様子を何とか聞き取ったところ、既に呼吸が止まっていたとの事。

「先生とおうちに伺いますから、待つて下さいね」

そう返事して、主治医やAさんに関わっていた訪問看護ステーションに急いで連絡を入れました。

Aさんは74歳。市営住宅で奥さんと二人暮らし。診療所で訪問診療（定期的な往診の事です）している方で、肺がんで手術もし、在宅酸素療法を使い、バルーンカテーテルも挿入しています。

度々肺に水が貯まったり、肺炎を起こしたり、入退院を繰り返していました。

いつ命が終わってしまっても、おかしくない状況ですよ…という話も医師からご家族に既に説明済み。

孫さん達が息を凝らして待っていました。

医師はAさんの死亡確認をし、お亡くなりになった事を告げ、介護していた家族に労いの言葉をかけました。

娘さんやお孫さん達は静かに泣いて、ベッドに横たわるAさんを囲み、Aさんの頬をさすったり、手を握ってお別れの言葉を告げていました。

Aさんの奥さんによると、今日はAさんの病院の定期受診があり、車椅子で出かけていたそう。Aさんは体調も良くて、診察後に二人で病院内のカフェでお茶をして、帰宅。

Aさんは疲れて横になって休み、奥さんは夕食の準備を始め、調理の合間に奥さんがAさんの様子を見に行くと、Aさんはもう息をしていなかったそうで、驚いて奥さんが診療所に電話をかけてきたのです。

「でも良かった。お父さんこんな風に亡くなって、本当に良かった。お父さんも私もここ数日間、とても穏やかに暮らしてたんですよ」

Aさんの奥さんは涙ぐんで、私にそう話してくれました。

Aさんが亡くなる3日前の訪問診療時またまた同伴したのが私。そういえばAさんと奥さん、二人の馴れ初めをご機嫌で話して下さってましたっけ。

前日は訪問看護師さんにケアし



ところがAさん、訪問診療開始した頃は寝たきりだったのに、訪問リハビリを始めてからベッド周囲を立て歩いて歩けるようになっていました。

そして診療所の通所リハビリにも通えるまでに体力も戻りました。

医師とAさん宅に訪問すると、奥さんや、近くに住む娘さん、お

てもらって、さっぱりして受診していたAさん。

この日は天気も良く、爽やかな日差しさし込むカフェで、奥さんとお茶したAさん。

夕飯の香りがする中、奥さんという大切な人の側で命を終えたAさん。

Aさん達が、病院でなく自宅で療養する選択を下さって本当に良かった…と思いました。

「こうやってご家族さんに見送ってもらったり、奥さんに介護してもらって、Aさん幸せでしたね」

いろんな思いはありましたが、私にはこれだけ奥さんに伝えるのが精一杯。

在宅で療養する事や生きていくという事、私達はこんな風に患者さんやご家族さんから学ばせていただいています。



たいしよう生協診療所往診チーム  
皆さんの生活(くらし)を支えます

